

縄文道通信第71号
—温故知新シリーズ—
環境考古学の時代
—環境考古学からの世界への発信—

縄文道———武士道———未来道

一般社団法人縄文道研究所
Copyright by Jomondo
Kenkyujo

環境考古学の視点からの縄文文化

——日本はSDG'sの環境先進国である——

世界は2015年に国連で採択された持続成長可能(Suitable Development Goal=SDG's)な社会を実現する方向で、国も企業も環境団体も積極的に動き始めた。

GX-GREEN TRANSFORMATION の時代である。

SDG's 17 条で環境に就いて触れているのは以下5項目である。

6条 トイレットの世界中への普及 7条 クリーンエネルギーへの取り組み 13条 気候変動への対応 14条 陸の環境を守る 15・海の環境を守る。

日本での環境への取り組みは、1970年代水俣病への取り組みが有り高度経済成長からエネルギー資源の見直し、自動車産業の排ガス削減への努力 等々国も民間企業も本格的に取り組んできた。

「環境問題は、世界の温暖化による地球規模での空、海、陸全ての破壊が進み、多くの環境学者は様々な観点で警告を発してきている。」

最近、NHK の番組で世界温暖化の警鐘が次の様に報じられていた。

「地球は現在の温暖化傾向が続いて平均温度が1.5度上昇すると、世界的な食料危機になると警告を発していた。又4度上昇すると世界人口の3分の1は生命の危機に、世界規模で生命の安全を求めて大量の移民が発生るとのこと。」

この様な世界的環境危機の中で、1990年半ばに、日本の青森県の三内丸山遺跡が発掘されて、縄文文化が注目され始めた。特に従来は余り目立たない考古学という学問が、日本全土での遺跡、遺構、遺物の発掘があらゆる地域で進み、コンピューターでの情報の蓄積により注目され始めた。

又同時に遺伝学も DNA 解析で縄文人の遺伝子解析も進み、現代人も本土人で約12%、沖縄人で約「25-27%、北海道で約60%以上の DNA 遺伝子が継承されているという事実が分かってきた。

上記、環境問題の深刻化が進み一方、考古学者、遺伝学者による新たな事実の発見で、北海道、東北の 17 か所の縄文遺跡が、世界遺産に正式に登録された。

上記の過去30年近くの動きを振り返ってみると：

1. 世界的に環境問題が深刻化して、人類の存亡が問われ始めた。
2. 縄文の文化遺跡が日本中に広まり、今や約90,000か所の縄文遺跡が日本中に存在していると言われる。
3. 1・の環境問題と2・の考古学の進展を並行的に捉えた問題意識と

解決の道の一つとして、環境考古学が唱え始められた。最初に問題意識を感じ、環境考古学という概念を紹介したのは国際文化研究センターの理事長の安田 喜憲氏である。安田氏の著書「環境考古学事始」―日本列島2万年の自然環境史、MC出版の前文での紹介のメッセージは以下の通りである。「30年近く前、環境考古学を提唱する研究者は著者を除いて皆無だった。当時地理学を専攻していた著者は、人類の歴史と自然の変動には大きな相関関係があると考え、全国の遺跡をまわり、地層内の土を採集し、土中の珪藻や花粉を分析した。その結果、当時の気候や、森林植生の変遷、水面の変動などを緻密に再生することに成功したのである。縄文時代は森の文化であり、縄文時代の人々は森の時代とともに生きていた。彼らは春夏秋冬と言う日本列島の季節の循環にぴったりと適応した生活を送っていた。1980年に出版された本書は、過去の気候や植生の変遷などが大きな影響を与えることを明らかにした。その事実は多くの読者に衝撃を与え、現在の環境考古学研究の基礎を築いた」。

安田氏はその後「人類1万年の文明論」―東洋経済「縄文文明の発見」―PHP社 梅原 猛氏との共著続々と縄文文化の世界史の中での位置づけ、世界に稀有なる自然との共存、共生文明を形成したのは縄文文化であり、縄文文化を環境学的に捉えて環境考古学の学問体系を樹立した。

その後、故人となられた元東北大学教授の松井 章氏が「環境考古学への招待」―岩波新書から出版した。本書のカバーで以下興味深いメッセージが寄せられている。

「貝塚で見つかる骨のかけらから、縄文人の食生活を推理し、遺跡の土の分析から古代のトイレットを突きとめる―文献史学、動物学、植物学、生化学、寄生虫学、などの研究成果を生かして、うずもれた過去の暮らしを明らかにする環境考古学の豊富な成果を紹介―日本各地と欧米のフィールドでスリルに満ちた探究が続けられている。」

筆者の松井氏は故人だが、欧米のフィールドでも環境考古学を通じて日本の縄文文化の自然との長期に亙る共生文化は広く知られるようになった。小生が属する国際縄文学会で、最近若手の環境考古学者の元金沢大学の環境考古学者の内山 純蔵氏の10回にわたる講演会に参加した。

未だ2回を終えた処だが、視点が完全に世界の中での環境考古学

という位置づけで、第1回が人類史における縄文のインパクトで、2回目が貝塚から見る縄文の宇宙観であった。
このシリーズのタイトルも「縄文から考える人類の歴史と未来」である。内山教授によると、縄文文化の世界的広がり、大変インパクトが大きいと述べている。例えば

1. 縄文土器は世界最古である。—世界史的にみて、火と水と土の結晶を日本から生み出した意義は大きい。
因みに「日本史から読む30の文明」—池内 了 京都大学教授 監修 日経ビジネス文庫においても、日本人が生み出した創造と工夫の最大の発明は「縄文土器」としている。
内山教授は西欧文明は西から東への移動だが、縄文土器はシベリアからヨーロッパへ伝搬、エストニアには紀元前7,500年前に、縄文土器が発掘されている由。要するに縄文文化を起点にユーラシア大陸を西への伝搬したのだ。
2. 最近のアメリカの遺伝学の研究では、カナダからアメリカ、メキシコ、ペルー、ブラジル、最南端のチリーまで、いわゆるアメリカ インディアン DNA は、日本の本州の縄文人のミトコンドリア ABCD 遺伝子と一致している結果が出たとのこと。内山 純蔵教授の環境考古学の視点から言えることは、縄文文化が世界的に影響を与え、これからの人類の歴史と未来への大きなインパクトを与える可能性があるということだ。今回の北海道、東北の縄文遺跡の世界遺産登録は、世界へ縄文文化のインパクトを、特に環境面から大きな影響を与えることは間違いない。
ある意味では、環境考古学は日本の自然との共生を生み出した縄文文化から生まれた学問で、今後益々縄文文化が、世界から見直されることを確信する。完

参考文献:環境考古学事始 MC 新書 安田 喜憲著
世界史の中の縄文文化—雄山閣 安田 喜憲著
人類1万年の文明論—東洋経済 安田 喜憲著
縄文文明の発見—驚異の三内丸山遺跡 PHP
梅原 猛、安田 喜憲 共著
環境考古学への入門 岩波新書 松井 章 著
日本史から読む30の発見 日経ビジネス文庫
池内 了 監修

縄文からかなえる人類の歴史と未来 内山 純蔵資料